

## 追憶

和道流空手道連盟

総本部 坂巻 明

早いもので、二代宗家がお亡くなりになって、3年近くになる。不死身の身体をお持ちと思っていた二代宗家が-----。人は、いつかは消える、明日は、わからないよといつもおっしゃっていた。一日、一日を大切に生きよと言う強烈な、最後の指導を私達に残されたのか。日々怠け心と格闘しながらやっている自分が情けない、未だ不肖の弟子から抜け出させない。もっともっと叱って頂きたかった。

2015年6月26日金曜日8時10分、築地での稽古を終えて道場を出る時、仕事の都合で参加出来なかった塾長の押田氏からメールが届いた。宗家が倒れて日大病院に運ばれたという内容であった。とにかく病院へと地下鉄に乗った。前日の稽古中「少し調子が悪い」とおっしゃって休憩されていたので、少し変だなと感じて、病院に行くことをお勧めした。今度は、精密検査を必ず受けてもらおうなどと考えながら池袋からタクシーに乗り替えた。やけに信号に引っかかるとイライラしていると押田さんから再びメールがきた。「宗家が亡くなった」と。

頭が真っ白になった。気がついたら、昨日と変わらないお顔の傍に立っている自分がいた。冷たい地下の霊安室、何も言わない宗家。只々涙が溢れてくる。現実と受け止められない、受け止めたくない・・・の闘ぎあいの中で、宗家との思い出が走馬灯のように駆け巡った。

初めて宗家とお会いしたのは、昭和39年5月の東海大学空手道部新入生歓迎会の時であった。どちらかと言えば野性的で武骨なOB及び上級生の居並ぶ中で、彫りの深い端正な顔立ちの男性が端然と座っていた。宗家であった。浮き上がる様な際立つ存在感に目を惹きつけられた。いま何故か、そのとき宗家が飲んでいたジュースの、鮮やかなオレンジ色が目に浮かぶ。

東海大学の文系学部があった平塚でご指導くださるときに、小田急線新宿駅にお迎えにあがった。ダブルのグレイのスーツに蝶ネクタイ、ソフト帽子の宗家が歩いて来た。周りの人々が霞んでみえるほど、恰好よかった。その時宗家は、弱冠29歳であった。

いつか俺たちも、ソフト帽をかぶろうと同期生と話したものである。

宗家からフリーをご指導いただくのは、100人を超える部員の中から、主将、副将だけである。私が2年生夏合宿のときであった。いつもは攻撃的な先輩が、

宗家が相手だとなかなか前に出られない。すると宗家は、すね蹴りから顔への霞、瞬間に飛び込んで、喉笛を押さえた。まさに流れる様な素早い動きで目を奪われた。あとからほかの先輩が「鼻毛まで抜かれるぞ」と技の凄さを語っていた。

社会人になって約4年間のブランクの後、(故)丹道彦氏の誘いがある本部道場(大和小学校)に通い始めた。私より少し遅れて、筋骨たくましい青年(仮にA)が習い始めた。彼は他流派の黒帯で、ボクシングスタイルの構えをする。履物は下駄で、道着を黒帯で縛り、剥き出しで肩から掛ける。あげく稽古終了後の掃除にも参加しない。

流石に我々も頭にきていた。ある日、道場清掃が終わる頃に宗家がAに声をかけて、フリーを始めた。Aがボクシングスタイルから、前に出ようとした瞬間、宗家の足刀が足首に飛んだ。Aの体は、腰の高さまで、跳ね上がり落下して動かなくなった。宗家は、暫しの間その場にいたが、何事もなかったように着替え場所に向かわれた。

足刀の名手とお聞きしていたものの、目の前で見た光景に戦慄と畏怖を感じ、身体に震えがきた。居丈高な行いや誇張したりする事が最もお嫌いな、宗家の逆鱗に触れたと思った。

それ以来、宗家とお話しする時は、微妙に緊張した。普通に会話をしている若い人を見ると、うらやましく感じた。

それでも、宗家のお話を伺うのは楽しかった。善哉を何杯もお代わりして店員を驚かせた話、著名な武道家とのお話、諸先輩方の武勇伝(迷惑?)等々、様々なお話しをお伺いした。

寡黙な印象を持っていたので、良くお話しされる宗家を見ると意外な気がした。いまとなつては、弟子たちに気を遣われていたのかも知れないと思う。

霊安室の微妙な空気の変化に気づいて、我に返る。そっとお顔に触れる、冷たい、本当に亡くなれたのだ。その実感が身体を包んだ。

告別式、葬儀、偲ぶ会、三代承継披露、51回全国大会と目まぐるしく続く行事は、宗家のいない悲しみを、一時、忘れさせてくれた。

連盟役員、連盟会員、大学OB会、武道関係者、宗家ご縁の方々をはじめ、大変多くの皆様に、ご支援ご協力を賜った。本当に有り難く、嬉しく、心強かった。

二代宗家を失った悲しみは、いつもいまもすぐそこにある。しかし多くの方々からの宗家に対する思いを伺い、二代宗家は、いまそれぞれの心の中に生きており、まさに生者がある限り死者は生けりである。

この日を境に和道流空手道連盟は、三代宗家を中心に皆で協力して、初代宗

家、二代宗家の築かれた武道の道を更に究める歩みをスタートさせたのはご承知の通りです。

そして今日、精力的に活動される三代宗家のご指導で、和道流空手道連盟の絆は、今まで以上に強まっております。また和道流をさらに進化させると確信しております。

私も二代宗家の、向上を止めたら終わり、死ぬまで稽古のお言葉を胸に、日々の稽古に励みたいと思っております。

